【153】

氏　名（本　籍）	下野敏見（鹿児島県）
学位の種類	文学博士
学位記番号	博乙第439号
学位授与年月日	昭和63年3月25日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	歴史・人類学研究科
学位論文題目	ヤマト・琉球民俗の比較研究

主　査	筑波大学教授	文学博士	北見俊夫
副　査	筑波大学教授	文学博士	宮田登
副　査	筑波大学助教授		牛島巌
副　査	筑波大学教授	文学博士	野口鐵郎
副　査	筑波大学教授		小澤俊夫

論文の要旨

本論文は，わが国の民俗文化に関し，ヤマト文化圏（トカラ列島以北の本土文化圏）と琉球文化圏（奄美諸島および沖縄県）の接点である薩南諸島の資料を基軸に据えて，南北の民俗文化を比較検討した内容のものである。駆使した資料は，著者が二十余年にわたり積み上げてきた民俗誌に基づくものであり，400字詰原稿用紙約960枚（ワープロ仕上げ），図表・写真も多数挿入されている。

比較研究の方法としては，柳田國男が唱えた方言周圏論を拡大した民俗周圏論と重出立証法との２つの研究法を根底に踏まえ，それを再検討し，見直しながら展開している。すなわち，近畿あるいは江戸を中心とする一大周圏の波頭がトカラ列島に及び，一方ではまた，首里・那覇を中心とする周圏の波頭が奄美諸島に及んでいると概括している。

本論文の構成は12章から成り，それらは第一篇物質文化―縄文民具と弥生民具，第二篇沿岸文化―漁撈と海神，第三篇儀礼文化―歌謡と儀礼の３篇に括られている。

まず序章として課題と方法―新しい視座の確保，伝播の変容（周圏論の問題），資料の比較（重出立証法の問題），階段変化（島嶼伝播と地域と時代性）など，立論の前提としての理論構築の研究姿勢など，仮説を明確に提示している。

第一篇第一章の「物質文化に見る南島基層文化の特色」では，鍬，オモゲーと小形馬，片口箕と丸口箕，ティルと背負い梯子，掘り棒とヘラ，琉球山刀，イザイと犁・足耕などの実態を述べながら，その機能と分布状態を分析している。また，これらの資料を操作するなかから，琉球文化圏が

ヤマト文化圏に接する境界として，歴史資料を援用して成立史を探って得た結果を時代的に，つぎの3種類に分けるという試案が提示されている。それは，①南方系古層文化圏－時代を遡るとさらに北上して本州の奥深くまで潜入していることを予測。②南方古層文化圏－琉球文化圏プロパーともいえるもの。③北方系古層文化圏－ヤマトから南下したものとする。第二章では，「日本の笊の系譜」を論じ，第三章の「南西諸島の高倉の系譜」においては，巨視的には南島の高倉は，ヤマトの古層高倉の残存という，一応の結論を得ている。第四章の「オモゲーとウナリガミの世界」では，殷時代より使用された馬具のオモゲーがクツワ以前の制御具であり，小形馬とセットでわが国へ流入したこと，そして，オモゲーとクツワの2つの馬具の比較を通して，ヤマト・琉球両文化圏の特徴を把握している。また，琉球の姉妹による兄弟を守護する霊威，ウナリガミ信仰とヤマトの船霊信仰や建築儀礼の問題と中国の航海守護神である媽祖信仰を比較し，ヤマト・琉球および東アジアの民間信仰の異同をも探究した。この点については，物質文化を主題としながらも，非物質文化の事例を組合わせて考慮するという，文化を複合した相として把握する必要性の配慮によるものである。

第二篇の第一章では，「南西諸島の海人」と題し，漁撈や航海に関する有形・無形の民俗文化を取り合わせて比較を試みた。第二章の「伝統漁撈の組織と信仰」では，漁村のムラ役人の役目・機能，成立状況を探り，その原像に迫っている。第三章「環シナ海の海神信仰」では，「竜神」と「ニライ・カナイと海神」に着目し，琉球文化圏の竜神信仰には，冲縄本島と宮古島を包む内圏と奄美諸島や八重山諸島を包む，より広い外圏の2つが存在し，外圏は琉球王朝の成立期（15世紀），内圏は島津の琉球侵寇後（17世紀）と考えられるとし，著者の方法論の有効性が発揮される箇処となっている。第四章の「トビウオ漁の民俗」は，南西諸島を中心に，トビウオ漁法や信仰について，東北地方や，南は紅頭嶼の事例をも見わたして追究した。なかでも，エビス神信仰は琉球にはなく，ヤマトだけにある民間信仰であること，そして，ヤマトではエビスの神体がある石が漁群を招き，琉球ではツカサやノロなどの神女がユー（豊饒）を招く形で魚を招いていることを指摘している。

第三篇においては，第一章「田歌の構造と展開」で，薩摩棒踊りが田歌から派生したことをつきとめ，さらにこの伝播に第一波と第二波との別を認めている。ヤマトの田植歌や田歌に比定されるものとして，琉球ではイェト（労働歌）の分野に入る「田歌・イェト」があるが，両者には直接の関連はないとしている。琉球でのこれら稲作叙事歌などは，祭礼の場でノロがオモロとして唱う神聖な神口なので，労働の現場へさらけ出すことはない。したがって，琉球ではヤマトのような田植歌が成立しなかったものと考えられると述べている。第二章の「ヤマトの琉球船歌の構造と展開」では，ヤマトの御船歌と琉球の「おもろさうし」の船歌を中心として比較し，後者が古代的な巫的歌謡のクウェーナから生み出されたものであることから，その歌謡形態と内容において時代差が大きいことを明らかにした。第三章「建築儀礼の特色と問題点」においては，南九州から八重山諸島にいたる地域の資料を比較し，その作業を通して，ヤマトのイラカ祭りが山の神への感謝祭であるのに対し，琉球のそれは，木や芽に付着している山の精霊を早く送り出すための儀礼であると規定できるとしている。第四章の「中国の石敢当とヤマト・琉球の石敢当」では，中国南部の石敢当を

臨地調査で現況を踏まえ，沖縄・奄美，ヤマトの石敢当の変容状況を述べ考察を加えた。

以上，全12章にわたり，民俗学の立場から，物質文化と非物質文化に関する諸課題を操作し，多くの有益な提言をなし，方法論上，「多同心的重層周圏構造」なる概念を提示し，今後の検証を世に問うている。なお，ヤマト，韓国と琉球・台湾との比較をなし，さらに中国を加えて東シナ海域の比較研究を実施する必要性と可能性を強調している。

審　査　の　要　旨

本論文は，①ヤマトと琉球両文化領域の，いわば割れ目に擬せられる薩南諸島を基点としたところから，日本文化をあらためて見直すうえで，画期的提言をなし，個々の民俗文化の意味・内容や方法論上の一新をはかるうえで，有効な論点を提示したことが高く評価される。②民俗文化を，文化複合の相において把握している点に新鮮味がある。
③日本列島における文化事象の分布状況を鳥瞰し，文化領域の設定が望まれている今日の学界状況のなかで，本論文は多くの貢献をなし得ている。

以上のように，下野敏見氏によって成された前進的提言のなかにも，よりいっそう厳密に検討してみると，著者に今後の課題としていくつか望まれる点も気付かれる。㊀琉球文化圏での分析作業がもっとも重厚さをもつのであるが，そこでの方法がそのまま，いわゆるヤマト文化圏にも適用されるのかどうかということ。若干目のあらい点が見受けられる。㊁民俗事象を歴史上の時代に，特定する作業については，さらに慎重さが望まれる。㊂民俗分布図が多く作成されているが，そのなかには，きわめて有効なものと，いっそう目の細かい資料的裏付けが必要かと思われるものもないわけではなく検討が望まれる。

以上，今後に残された問題はあるにしても，わが国の民俗文化理解と周辺諸地域との比較への途をきり開いた研究の成果として，学界に寄与するところが大きく，高く評価し得ると判断される。

よって，著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。